

## 日本語教科書における終助詞の扱い

曹 春 玲

日本語には男女による言語差が主に音声、形態素、語彙などの面で見られ、それらは単に言語的な違いということだけに留まらず、コミュニケーションを円滑に進める上で重要な社会言語学的働きをすることが多い。

実は日本語学習者にとってはある程度の期間日本語を学習すると、日本語は男性であるか女性であるかによって表現形式に差異があるということに気づかされる。学習が進むにつれ学習者自身、自分の性に相応した表現形式が使えるようになりたいという願望が出てくるだろう。このように、男女差が顕著に現れる終助詞を日本語教育でどのように扱えばよいかについて考えることである。では、日本語教科書において、終助詞の男女差がどのように扱われているかについて調査分析することとする。日本語の男女差の特徴と日本語教育という観点から、教科書分析を試みることにした。

### 4.1 分析対象とした日本語教科書

分析対象としたのは日本国内で編集された日本語教育用教科書である。教科書の選定に際しては、男女差を項目として扱っている教材であること、男女差の具体例を明示している教材であること、そして比較的多くの日本語教育機関<sup>1</sup>で使用されている教材であることを条件とした。対象としたのは以下の5冊である。(1)と(2)は初級向け、(3)～(5)は中級向けである。

- (1) 国際交流基金 日本語国際センター編 (1998) 『日本語初歩』 凡人社 (以下『初歩』と略)。
- (2) 島田めぐみ (2001) 『わかるビジネス日本語』 アスク (以下『ビジネス』)。
- (3) 目黒真実他 (2001) 『コミュニケーションに強くなる日本語会話』 アルク (以下『コミュニケーション』)。
- (4) 富坂容子 (1997) 『なめらか日本語会話』 アルク (以下『なめらか』)。
- (5) 高柳和子他 (2001) 『日本語会話 中級 I・II』 凡人社 (以下『中級』)。

分析項目は、出現頻度の高い終助詞「よ、ね、の、わ」と「ゼロ」終助詞<sup>2</sup>の5つ項目を選択した。分析に際しては、教科書については会話文と聞き取り会話文を分析資料とした（練習問題を含めない）。各教科書の文の選択は、分析対象項目のいずれかを含む平叙文だけに絞ることにした。教科書の平叙文を選び方については、次の会話例を見てみよう。

【1】女性：山口さん、また仕事やめたんだって。

男性：あれ、また？これで、三度目じゃない。

女性：そうね。最初がサラリーマンで…

男性：うん、まあ、僕も、

あいつはサラリーマンには向いてないと思ってたんだ。

時間に縛られるのがきらいだったから。

女性：次は高校の先生だったわね。

男性：そうそう。あのときは、ぴったりの仕事だと思ったんだけどな。

山口って、けっこうめんどろみがいいだろう。

女性：そう、そうなの。ところが、校長先生とぶつかっちゃって。

男性：うん、それで、そのあと新聞記者に就職したんだってよな。

今度は何が原因なの？

女性：やっぱり、上司とうまくいかなかったらしいの。

男性：あ、そう。結局、あいつ、会社とか学校みたいな組織の中でやってい

けるタイプじゃないだよな。人に指図されるのはいやなんだよ。

(中級Ⅱ2001：112)

上の会話例の中では、波線をつけている文を教科書分析の対象資料とし、波線を付けてない文は分析対象から除外した箇所である。各教科書から抜き出した平叙文の総数を集計した結果を次の表1にまとめた。

表1: 5つの教科書における文数(平叙文)

教科書名	初級レベル		中級レベル		
	初歩	ビジネス	コミュニ	なめらか	中級
本文数	1-34課	1-45課	1-10章	1-23課	1-12課
文数	621	245	386	501	232

以下で示す分析結果は、すべてこれらの文を基にして分析したものである。

#### 4.2 各教科書による男女差の扱いの説明

『初歩』の場合、男女ともに使う表現を教えるので、男女ことばの分化をしていないと考えられる。この教科書には男女ことばを示している標示がされていない。

『ビジネス』の場合では、男女による言葉づかいの違いに学習者の注意を引くようイラスト（♂が男性、♀が女性）を使って工夫している。

『コミュニケーション』でも記号による工夫が行われている。普通体の口語で男性の言い方と女性の言い方の違いがある場合、男性専用の言葉づかいには♡、女性専用の言葉づかいには△が付けられている。ただし、無印のものは男女に関わりなく使えることを示している。

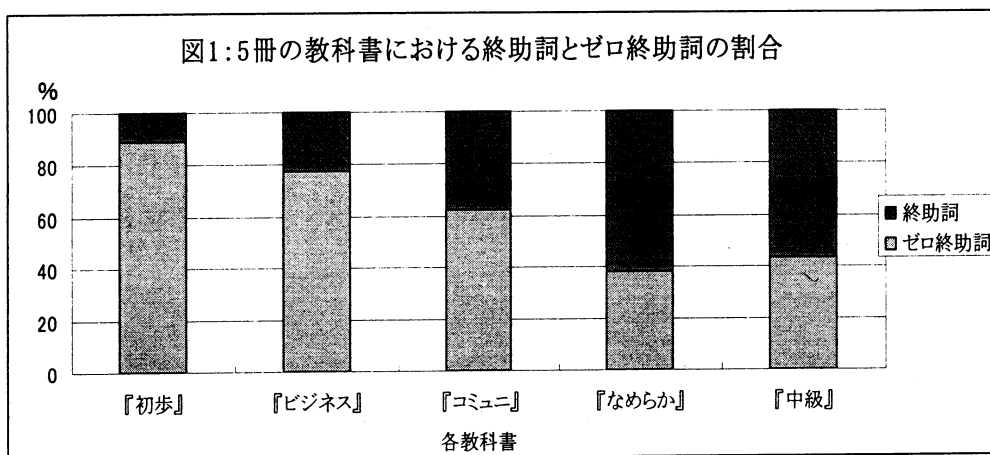
『なめらか』のくだけた会話では、登場人物の性や年齢によってことば使いの異なることが多いから、この教科書では用例や練習問題の中ではそれらを「A/B」男性、女性、「男A/B」一般の男性、「男C/D」中年以上の男性、「女A/B」一般の女性に示している。

『中級』の教材では会話による男性の表現形式であるか、それとも女性の表現形式であるのかを示しているマークはないが、会話中では発話者の性別が明確に表示されている。

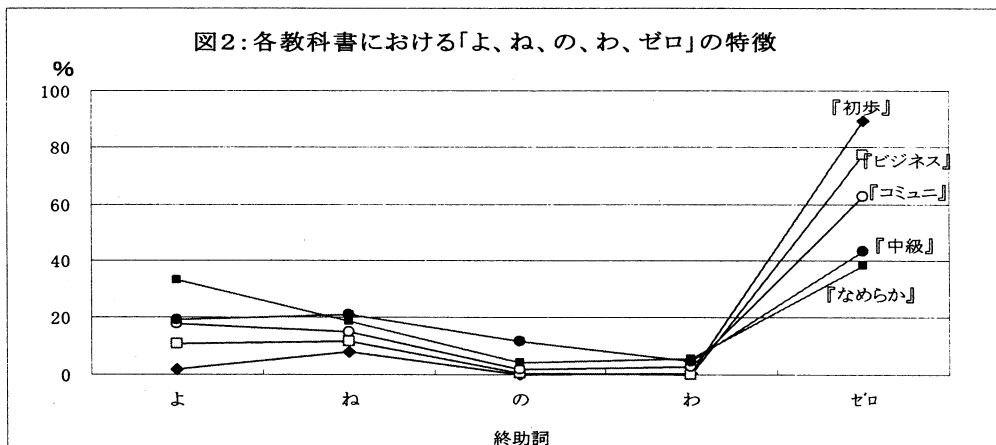
### 4.3 教科書全体の結果

ここからは、教科書の分析結果について述べていくこととする。個々の教科書の詳細を提示する前に、まずは全体の結果を示すこととする。

4.1 節で述べたように、教科書分析は「よ、ね、の、わ、ゼロ」の5項目を分析対象とした。その上で、全体の傾向をつかむ目的から、各教科書の平叙文の総文数（表1）を基準としてこれらの項目の出現文数をカウントした。5冊教科書の4つの終助詞とゼロ終助詞の割合の全体像を示すと次の図1である。



上図を概観すると、ゼロ終助詞の割合は初級日本語から中級日本語までだんだん少なくなるのに対して、終助詞の割合は教科書のレベルが上になるにつれ高くなることが判った。次は各教科書における5項目の特徴（図2）を見ていく。



上図の形によると、5項目全体では「ゼロ」の出現文数が圧倒的に多い結果であった。特に、『コミュニケーション』、『中級』や『なめらか』のような中級教材よりも『初歩』、『ビジネス』の初級レベルの教科書にゼロの割合が高いことが分かった。

次に多いのが「よ」と「ね」であるが、「よ」については教科書間でかなりのばらつきが見受けられ、『初歩』や『ビジネス』などの初級用では、それらの頻度がかなり低い結果である。一方、「ね」については、いずれも20%程度以内であるが、教科書間のばらつきはより小さいようである。さらに、「の」と「わ」の出現数は「よ」「ね」と比較してみるとさらに少なくなっている結果となった。出現頻度のみからすると、教科書間で5項目の出現頻度は一致しているわけではないが、およそ「ゼロ>よ>ね>の、わ」の順であると言えよう。

#### 4.4 各教科書における5項目の男女の扱い

『初歩』では、会話の中に登場する発話者を男性と女性の役に分けてないので、男女の発話を判断するのが不可能である。文末に終助詞を加えた表現である「ね」と「よ」は、男性の表現形式か女性の表現形式かについて教科書の中には指示マークがなかった。このことは、これらの文末表現形式を、たとえば、「とても可愛いですよ、日曜日は忙しいですね」など男女共通と考えていることを表していると言えるだろう。

『ビジネス』では「よ」の男女の会話例数はほぼ同じだが、「ね」は男性よりも女性のほうが約2倍ほど多いという結果である。「よ」と「ね」については、これらの用例数の差はそれほど大きくない。さらに、「の」と「わ」については、男性の「の」の使用1例を除けば、男女の会話例はまったく見い出さなかった。「ゼロ」は男女とも会話例が多いが、男性の方は女性よりもおよそ10%多くなっている。

『コミュニケーション』の場合、「よ」については女性より男性の方が10%以上会話例数が多いことがわかる。「ね」については、「よ」よりも差が少なく、男女の「ね」

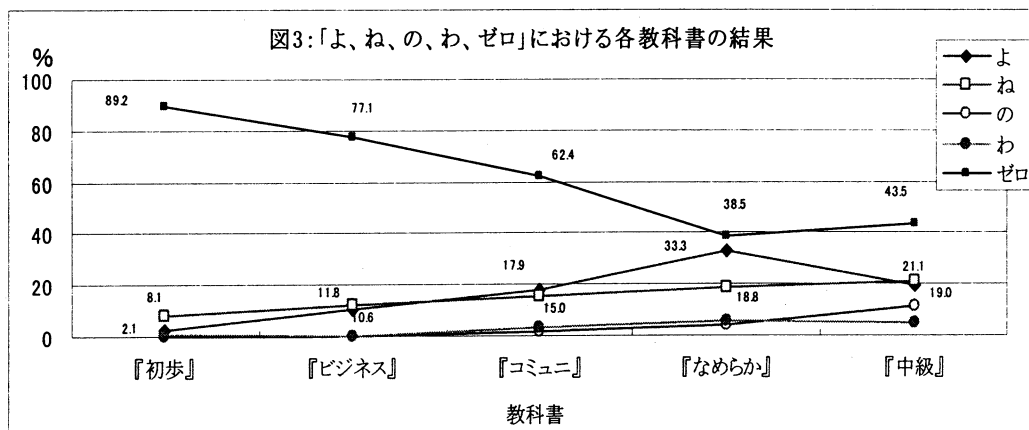
の会話例数はほぼ同様である。「の」と「わ」の会話例は、女性によるものがわずかにあるだけで、男性の会話例は見出されなかった。「ゼロ」については男女の会話例数が一致していた。

『なめらか』については、「よ」は男性の用例が女性のそれよりもずっと多いのに対して、「ね」は女性の用例が多くなっていることが読み取れる。教科書の説明によると、相手の反応を確かめながら会話を進めるために、ひとまとまりの言葉の後に「ね」などの語を入れる、またこの「ね」は日本語のリズムをとるためでもある、と書かれている。

『中級』では「よ」は男女ともに用例があるが、男性のほうが女性より多い結果となった。「ね」はこの男女差が逆転している。「の」は男性の用例がわずか（4例）で、女性用例が多い。「わ」は女性のみで、たとえば「知らないわ、リンゴが入っているわ」、男性による会話文は皆無である。「ゼロ」は他の終助詞と比べて圧倒的に用例が多いが、男性のほうが女性より多く会話文が使われていた。

#### 4.5 各教科書の分析結果のまとめ

以上、5冊の日本語教科書における「よ、ね、わ、の、ゼロ」の5項目の調査分析を行った。主な結果を、各教科書の特徴が分かるように、これを横軸に並べて表示してみることにする。



教科書全体を通じた主な結果は以下のとおりである。

1) 各教科書において「ゼロ」の例文数が圧倒的に高い。特に、初級日本語のそれは顕著である。ゼロ終助詞の使用は男女とも会話例が多く、男女差のないニュートラルな言い方として多用されているのであろう。

次にすべての教科書の中で『なめらか』の「よ」の用例数が多いことも特徴的である。この教科書を除けば、「よ」と「ね」の割合はどの教科書においてもほぼ同じである。これ

らの用例数について言えば、『初歩』から『中級』まで徐々に高くなっている。とりわけ「ね」は教科書内では男女ともにほぼ同じように使われており、教科書での扱いは中性的だと言えるだろう。「の」と「わ」の用例数を「よ」と「ね」のそれと比べると前の2つは随分少なくなるが、各教科書の用例数の状況は女性の方が多い。こうしたことから、「の」と「わ」は依然として女性的な終助詞として扱われていると言っても過言ではないだろう。

2) 各教科書の男女差について、初級日本語では丁寧体「です／ます＋ね／よ」の文が幾つかあるが、男女差が示されていないので、どちら向きの表現として扱われているかは判断できない。このように、男女差が明らかに示されているのは初級日本語ではなく、中級日本語からであることがわかった。中級レベルになると、終助詞による男女差がかなり意識されて教科書の編集が行われているようである。しかし、終助詞に関する男女差の扱いはすべての教科書において一様だとは言えない。たとえば、「N＋だよ」「N＋だね」などの語形は『コミュニケーション』では男女兼用表現と述べられているが、『ビジネス』では男性用と述べられている。

3) 『コミュニケーション』、『なめらか』と『中級』3冊の中級教科書に現われる終助詞のうち、「だよ、だね、」のような形式は男性的言い方といわれているものの、女性にも用いられている。「のよ、わよ、わね」のような形式は女性的な言い方で、男性は用いない。女性的用い方の文末表現、とりわけ終助詞の「だよ、てよ、のよ、わよ」と「だね、てね、のね、わね、よね」については、男性より女性的な表現の方が多彩であると思われる。

#### 4.6 日本語の男女差と日本語教育

以上の分析した結果から、日本語の終助詞は男女によって使い方が違うが、その一部については男女差の縮小傾向があることを指摘した。しかし、年輩の女性のことばや、若い人でも改まった場所での会話の中では、女性特有の表現形式が依然として残っていることも事実であるだろう。言い換えれば、日本語の性差が縮まってきていることは事実だとしても、男女差が完全になくなったわけではない。男女差は名詞や、接頭語、接尾語にも見られるが、大きな違いは終助詞である。

日本語教育の場合、学習者に日本語の男女差を正確に教える必要があるだろう。その必要があるという立場から、鈴木（2000：69）は次のように述べている。

日本語学習者は、本人の意図ではないにもかかわらず、従来「男性語／女性語」とされてきた表現を多用し、必要以上に「男らしい／女らしい」という印象を与えたり、女性の学習者が実際に耳にした日本人の女性の話し方をそのまま真似て「男っぽい」とか「ぞんざいだ」という印象を与えたりする可能性があると考えられるからである。

これに関連して「女性の言葉づかいを教える必要性」として、HIDASI (1994 : 13) は次の3点を挙げている。

1. 成人社会では、いまだに女性と男性の言葉遣いが異なっているので、「中性化」<sup>3</sup>にはまだ数十年かかるという点。
2. 外国人に対して、「より中性的な」言葉を使う女性も、日本人より上品な言葉遣いをするため、女性の言葉の切りかえる傾向をもつ点。
3. 日本社会は、誤用のうち言葉遣いの誤りに最も批判的であり、文法的過ちには寛容だが、「使用域—選択」および文体的誤用には厳しい点。

話しことばの男女差を学習者に教える立場にたつとしたら、どう教えるかというのが最初に問われることが多いが、その前に、男女差そのものを教えるべきものかどうかという疑問の解決が先決である。この点について、小川 (1997 : 119) は次のように述べている。

- 1) 上級以上レベルの学習者には、男女差があるという事実は、必要な知識として教える。
- 2) 男女差を知り、自分に相応しい使い方を習得するのは、ポライトネス (politeness) の観点で必要だという認識をする。
- 3) 具体的な用法を知るには、辞書や研究書類に頼らず、コミュニケーションを取りたい日本語母国語話者あるいはその集団の話し方に注意して耳を傾け、自ら特徴をつかみとってみる (母語習得と同じやり方)。

1) と 2) については教える環境が日本国内、海外ということに関わり無く、男女差についての日本語教育の参考になるが、3) は海外の学習者に対しては、通用しないと思われる。言うまでもなく、海外の学習者は日本人と話すチャンスが少なく、辞書と参考書のみでしか、なかなか日本語に触れられない。日本語を教えるには、日本語の男女差を教えるのも重要である。学習者には終助詞「わ」「わね」「わよ」は女性特有の表現形式で、年配女性と話をするときには、よく出てくるので覚えておくことが必要である。あるいは各種のことば使いの語用論的ルールを教えるのは大切なことだと筆者は感じている。日本語を習得して、日本人と同じように日本語を駆使したい、また、日本文化に心酔して日本人になってしまいたいという学習者が目的に近づけるよう手助けする日本語教師は「日本語らしさ」や「美しさ」の実体を追い求め、それを教えなければならない (遠藤 1990)。

教科書分析の結果からすると、初級レベルの学習者には男女差を教えることは必要とは考えられていない観がある。しかし、本当に初級学習者に日本語の性差を教える必要はないのだろうか。また、初級の学習者にそれを教えることは不可能なのだろうか。筆者は、

それは日本語教師の目指すレベルの高さにかかっていると考えている。初級の日本語学習者には、主に発音、名詞文、形容詞文（イ形容詞、ナ形容詞）、動詞文で、文末には「です」「ます」の丁寧体という基礎日本語を教えると考えられる。初級学習者の日本語レベルによって質問したいのに質問できない状況に陥りやすいからである。これについて遠藤（1990）の説によれば、初級では、日常生活に必要なことがらを日本語で表現し、相手の問いかけが理解でき、応答できるようになることが目標である。自分の言いたいことを表現するための語彙や文型を獲得する時期である。その時期に言えば、外の飾りにすぎない敬語や女性用表現形式を練習させるために時間を割く余裕はない。たとえ教えても内容がともなわず、ちぐはぐで奇妙な発話になりがちである。日本語教師にとってはかなり大変なことだが、初級の教師にはそれもいたしかたないことだと思う。

中・上級に進めば事情は異なる。そのレベルにあった表現をするために敬語を使わなくてはいけない場面に遭遇するし、女性的表現を伴う発話のニュアンスが理解できなくては適当な応答ができない場合も出てくるからである。知識として教えたあとに敬語や女性的表現を実際に使用するかどうかは学習者の選択に任せていいのではないだろうか。

日本語の性差のもつ意味、社会的位置づけ、役割などは日本社会にしばらく滞在し、日本人女性がどういう場面であつていのかを見聞きするうちにおおよそはわかってくる。日本の女性が「早く行ったほうがいいわね」「何時かしら」<sup>4</sup>などの終助詞を使うことがあるからといって、女性学習者にもそれを言わせる必要はまったくない。終助詞を使ったほうが自分の意志がよりよく伝えると学習者自身が思のならば使えばいいだろう。

日本語において男性差と認識されてきたのは、終助詞「わ、ぞ」など、美化語「おー」、語彙「すごい、すげえなど」などの言語形式であるが、それだけでなく、断定を避ける、強調が多い等の言語表現の特徴や、話題提供を積極的に行い、沈黙修復を頻繁に行う等の発話行動の傾向など、言語行動に関わるすべての要素が分析の対象となつてきている（内田 1997）。

また、男女差を明確には分けられない場合もある。これに関連して、中島（1999：61）は日本語の疑問表現を中立的・女性的・男性的の3種類に分類している。高崎（1999：213）は女性の使うことばを、A：女性専用とされる言語形式・表現、B：女性が多用するとされる言語形式・表現、C：女性が普通あまり使わないとされる言語形式・表現、D：女性がほとんど使わないとされる言語形式・表現の5つ段階に分類し、現代の日本社会では、働く女性の表現形式の多様性を、「男性化している」「性差が縮まっている」の2種類の観点から行っている。このように、ある要素が男性的であるか女性的であるかという疑問には流動的な面があり、すっきり整理するには難しさがある。時代の経過に伴う変化や、世代や個人による感じ方の違いという要因に加えて、日本語教育の観点から見て整理が難しいのは、同じ形式であってもコンテクストによって性を示唆する程度が違うことがあるという点である。たとえば、終助詞「の」<sup>5</sup>について見ると：



- a、「今日は大学へ行くの↓」・・・・・・・・平叙文
- b、「今日は大学へ行くの？」・・・・・・・・疑問文
- c、「今日は大学へ行くの↓」・・・・・・・・命令文

aとcはかなり女性的表現形式であるが、bは女性だけの表現形式とは思われない。このように、日本語の男女差について、その表現範囲や種類を決めるには複雑な面があるのは事実である。

しかしながら、ことばは文化の一部なので、日本の文化・日本人に代表される考え方から日本語は切り離せない。ことばと性差に関しては国によってそれぞれ考え方が違い、かなりデリケートな問題である。したがって、日本の考え方を押しつけない形であると同時に、日本の考え方をただ批判の対象にするのではない形で日本語を教える必要があると筆者は考えている。日本にはいろいろな考えの持ち主がいる、たとえば、女性の表現形式を使いうるさい人がいたりするので、男性・女性がとくに多く用いることばや、逆に女性・男性が使うと与える印象が変わってしまう(できれば避けたいほうがいい)ことばは詳しく説明しておいた方がよい。たとえば、終助詞「わ」について、語気を柔らげる「わ」の説明や、女性の言い方は男性の言い方から断定の助動詞の「だ」を取ったものが多いという説明、また同じような状況では、普通は女性の方がより丁寧なことばを使うという説明などが必要と思われる。

外国人が日本国内で働くときなどに、有能な人間なのに日本語を正しく話せないという理由だけで評価が下がってしまう場合がある。また、日本語を達者に使いこなしている女性が日本人から「君の日本語はとてもうまいけど、もう少し女らしく話すすと完璧なんだが」とか、「あなたの日本語はきつい。もう少しやわらかくいったほうがいい」<sup>6</sup>と忠告や注意をうけたという例がいくつかある。筆者自身もこのような経験をしたことがある。そうならないためにも、円滑なコミュニケーションをするためにも、日本社会では、言葉づかいや男女差の使い方などきちんとした説明をする必要がある。たとえば、日本語教師は学習者を支援する立場なので、自らの男女差についての知識・意識を提供し、研究論文の資料、総計調査結果なども提供して、日本語の性差を説明する必要がある。しかし、性差を押しつけることは必要ない。ことばにうるさくない人もたくさんいることかただ。相互に理解を成立させることがまず大事である。

注：

- 1 国際交流基金・日本語国際センターで編集された日本語教材やアルク、凡人社の出版社から出版された日本語教材は日本全国の日本語学校や各大学の留学センターの日本語教育場で使用されている。
- 2 筆者の博士論文(2006年9月)による1950年～2003年の文学作品における終助詞の使用状況の全体像を比較するために、「よ、ね、な、わ、さ、ぜ、かしら、ぞ、かい、だい、こ

と」12項目の終助詞文をすべて整理して、分類した終助詞の総数と、終助詞全体に占める個々終助詞文の数を百比率にした。その中で出現頻度の高い終助詞とゼロ終助詞「よ、ね、の、わ、ゼロ」を限定することとした。

- 3 インフォーマルな場面において、男性が女性語を、また女性が男性語を使用することになり、男性の話しことばと女性の話しことばが類似したものになってきているという現象を指して「中性化」ということにする（鈴木 2000：57）
- 4 遠藤（1990）「女らしい日本語を教えるべきか—外国人の日本語を考える—」『月刊日本語』のから用例である。 p. 13
- 5 佐久間（1983）の研究による「の」は終助詞として主に女性の発話の中にあられる。この終助詞は、疑問の「か」に変えて「の？↑」と調子を上げるところに特色があつて、相手の注意を引くためのものである。疑問の場合は、上昇調のイントネーションを帯びて発言される。日常会話として男性もよく使われている。
- 6 遠藤（1990）「女らしい日本語を教えるべきか—外国人の日本かを考える—」『月刊日本語』からの用例である。 p. 13

#### 日本語教材

国際交流基金 日本語国際センター編（1998）『日本語初歩』凡人社

島田めぐみ（2001）『わかるビジネス日本語』アスク

目黒真実他（2001）『コミュニケーションに強くなる日本語会話』アルク

富坂容子（1997）『なめらか日本語会話』アルク

高柳和子他（2001）『日本語会話 中級Ⅰ・Ⅱ』凡人社

#### 参考文献

浅田浩文（1998）「第二としての日本語の男言葉、女言葉 男女差を示す文末表現においての日本語学習者の産出、受容能力」『日本語教育』96 日本語教育学会

上原聡・福島悦子（2004）「自然談話における「裸の文末形式」の機能と用法」『世界の日本語教育』14 国際交流基金 pp. 109-123

宇佐美まゆ（2005）「ジェンダーとパライトネス—女性は男性よりパライトネスなのか？—」『日本語ジェンダー学会誌』第五号 pp. 1-14

遠藤織江（1987）「女らしい日本語を教えるべきか」『月刊日本語』第3号 pp. 12-13

小川早百合（1997）「現代日本語における文末表現の男女差」『日本語教育論文集—小出退職記念』凡人社 pp. 205-220

大野 晋（1992）「日本語の助動詞と助詞」『岩波講座 日本語 7 文法Ⅱ』岩波書店 pp. 3-28

佐久間鼎（1952）『現代日本語法の研究』厚生閣

曹 春玲（2006）『日本語の終助詞における男女差についての動態的研究』広島市立大学大学院国際学研究科

中島悦子（1999）「疑問表現の様相」『女性のことば・職場編』ひつじ書房 pp. 59-82

高崎みどり（1999）「女性の働き方とことばの多様性」『女性のことば・職場編』ひつじ書房 pp. 213-239